

天使ガブリエルとマリア

2020年12月18日
日本基督教団仙台北三番丁教会
佐藤 司郎 牧師

聖書：ルカによる福音書 第1章26節-38節

²⁶六か月目に、天使ガブリエルは、ナザレというガリラヤの町に神から遣わされた。
²⁷ダビデ家のヨセフという人のいいなずけであるおとめのところに遣わされたのである。
そのおとめの名は、マリアといった。²⁸天使は、彼女のところに来て言った。「おめでと
う、恵まれた方。主があなたと共におられる。」²⁹マリアはこの言葉に戸惑い、いったい
この挨拶は何のことかと考え込んだ。³⁰すると、天使は言った。「マリア、恐れることは
ない。あなたは神から恵みをいただいた。³¹あなたは身ごもって男の子を産むが、その子
をイエスと名付けなさい。³²その子は偉大な人になり、いと高き方の子と言われる。神で
ある主は、彼に父ダビデの王座をくださる。³³彼は永遠にヤコブの家を治め、その支配は
終わることがない。」³⁴マリアは天使に言った。「どうして、そのようなことがありえま
しょうか。わたしは男の人を知りませんのに。」³⁵天使は答えた。「聖霊があなたに降
り、いと高き方の力があなたを包む。だから、生まれる子は聖なる者、神の子と呼ばれ
る。³⁶あなたの親類のエリサベトも、年をとっているが、男の子を身ごもっている。不妊
の女と言われていたのに、もう六か月になっている。³⁷神にできないことは何一つな
い。」³⁸マリアは言った。「わたしは主のはしためです。お言葉どおり、この身に成りま
すように。」そこで、天使は去って行った。

今年は、思いもかけない新型コロナウイルス感染症の大流行によって、私たちの生活は大きな制約を受
けることになりました。学校も、私たち教会も例外ではなく、困難を強いられています。

私たち教会のことを少し申し上げれば、この4月、5月、会堂に集まっただけの礼拝は中止を余儀
なくされました。昨今の状況では、いつ何時ふたたびそういうことになるかも知れず、非常に心配
しているところです。

こうした中で私たちがクリスマスをお祝いするという、いな、お祝いしなければならぬとい
うこと、そのことの意味は、どこにあるのでしょうか。そんなことを考えながら、聖書が語り伝えてき
た古い物語に、しばらく一緒に耳を傾けたいと思います。

1 マリア

今日の聖書は、イエスの誕生予告、それを一人のおとめが驚きながらも最後には受けとめ、受
け入れるところです。いわゆる受胎告知です。

おとめの名はマリア。このマリアは、キリスト教では、カトリック教会の専売特許のように思われますが、決してそうではありません。私たちプロテスタント教会にとっても、カトリックとは別の意味で、つまり、その信仰のゆえに、マリアは大切な模範となるべき人物です。

マリアを今日の聖書ははじめに紹介していますが、きわめて簡単なものです。この若い女性はガリラヤのナザレに住んでいたこと、ヨセフという人と婚約していたこと、そのことだけです(26-27 節)。

何が書いてないのでしょうか。マリアとはどんな人であったかというようなことは書いてありません。「身分の低い」というようなことは、少し先のほうに書いてありますが(48 節)。それ以上のことは何もありません。

マリアはじっさいはじめから特別の人というわけではありませんでした。何か自分の出身を自慢できるとか、何かその能力や性質がみんなに認められていたというのでもなかったのです。むしろ当時の政治の、また宗教の中心、ユダヤのエルサレムからはるか遠い、「異邦人のガリラヤ」(マタイによる福音書 4 章 15 節)と呼ばれ、軽んじられていた辺境に住む一人のおとめにすぎなかったのです。なぜ彼女が神の救いの業に用いられたか、神が選び出されたとしか言いようのないことです。彼女において神のわざが静かに始まったのです。

ただマリアがヨセフという人のいいなずけであったということ、これはマリアを知る上で重要です。

「身分の低い」マリアをいいなずけとしていたヨセフもまた、裕福な生活をしていた人ではありません。ただ彼は「ダビデ家のヨセフ」、つまりダビデの家系につらなる人でした。

それが重要なことであったのは、イスラエルを救うメシア(「キリスト」に同じ。救い主の意味)はダビデ王の再来、少なくともその家系から出ると信じられ、期待されていたからです。マリアはダビデの家系のヨセフに嫁ぐことによってその身分を獲得します。マリアはこうして人間の歴史の只中で遂行される神の救いの歴史に深く関わっていくのです。

2 受胎告知

神の救いの歴史とマリアの関わり、それは彼女に天使カブリエルが現れることから始まります。天使は神の言葉を伝えます。

天使は、彼女のところに来て言った。「おめでとう、恵まれた方。主があなたと共におられる」。マリアはこの言葉に戸惑い、いったいこの挨拶は何のことかと考え込んだ。すると、天使は言った。「マリア、恐れることはない。あなたは神から恵みをいただいた。あなたは身ごもって男の子を産むが、その子をイエスと名付けなさい。その子は偉大な人になり、いと高き方の子と言われる。神である主は、彼に父ダビデの王座をくださる。彼は永遠にヤコブの家を治め、その支配は終わることがない」(28-33 節)。

天使はマリアに「あなたは身ごもって男の子を産む」と告げます。しかしマリアは戸惑い、考え込み、恐れます。それは当然です。いったい何がどうなっているのでしょうか。

マリアが戸惑い、考え込み、恐れているのに、天使はこれを恵みのこととして伝えています。「あ

あなたは神から恵みをいただいたのだ」。恵みとは「神が共におられること」です。私たちの理解を超えた出来事に私たちが遭遇しても、たとえそれが試練だとしても、「神が共におられるなら」、それを信じることができるなら、それはどこまでも恵みです。

マリアの戸惑いと恐れは「あなたは身ごもって男の子を産む」と聞いてますます大きなものとなったのです。ヨセフと婚約中とはいえ、まだ一緒には暮らしておらず、当時の習慣にしたがって両親のもとにいたからです。

マリアは天使に言った。「どうして、そのようなことがありえましょうか。わたしは男の人を知りませんのに」。天使は答えた。「聖霊があなたに降り、いと高き方の力があなたを包む。だから、生まれる子は聖なる者、神の子と呼ばれる」(34-35節)。

「どうして、そのようなことがありえましょうか」。このマリアの言葉は少し注意を要します。というのも、そんなことありえない、というニュアンスでこれは受けとられてはいけないからです。

この言葉の意味を汲んで訳せば、「どのようにしてそれは起こることになるのでしょうか」となります。マリアは、疑っているのではなく、そうした驚くべきことが、起こるとしたら、どのようにして起こるのか、つまり How を問うているのです。

そこで天使はこう答えます。「聖霊があなたに降り、いと高き方の力があなたを包むからだ」と。

「降り」「包む」というのは、旧約聖書以来、神の臨在、その力、また力ある働きを示す言葉です。「聖霊があなたに降り、いと高き方の力があなたを包む」というのは、神の力がそこに働くということです。それゆえ天使も、生まれる子は「聖なる者、神の子」と呼ばれると言っています。イエスはその存在そのものを神の力、聖霊に負っているのです。

これらの天使の言葉は、もちろん予告にすぎませんが、しかし私たちが注意しておくべきことは、こうして生まれる子が「いと高き方の子」であり、「聖なる者、神の子」であると共に、一人の女から、人の子として生まれるということです。イエスという名をもつといってもいいかもしれませんが。彼は人の子、まことの人間です。女から生まれ、この世に生きる人間だれもがもつように、名前をもちます。名前をもって呼ばれる人間、血肉をそなえ、悲しみにおいても喜びにおいても、嘆きにおいても微笑みにおいても、私たちと同じ一人の人間、神の子であり人の子であるイエス、この方が、いま誕生しようとしているのです。

改めて、クリスマスとは何か、問うてよいと思います。それは神が人となって私たちの間にお住まいになったという出来事です(ヨハネによる福音書 1 章 14 節)。それは神が人を、いな私のことを全部知るためです。連帯するためです。そして私たちがイエスと共に生きるようにするためです。イエスは人の子として神のために生きた人です。私たちはどうして神のために生きることなどできません。その私たちが神のために生きるようになるためです。イエスは神と共に生きる新しい道をすべての人に開いてくださったのです。神を信じて生きる者も、神の子として生きることができるようになるためです(ヨハネによる福音書 1 章 12 節)。神われらと共にいます(インマヌエル)、それを私たちに証しするためにイエスはお生まれになったのです。

3 マリアの信仰

先ほど、ここで、つまり受胎告知を伝えるこの箇所、マリアの人格は問題になっていないと申しました。しかし天使ガブリエルとの対話の中でマリアの人となりが見えてきています。私たちも見逃すことができません。マリアの信仰です。

申し上げたように、マリアは無名の、ごく普通の一人の女性でした。それが天使の現れに接し、夫ヨセフの子でない子を産むようになると告げられます。彼女は、戸惑い、考え込み、天使に「どうして、そのようなことがありえましょうか」と問いかけたのです。そのような彼女が、しかし最後には、こう言って天使の言葉を受け入れています。

わたしは主のはしためです。お言葉どおり、この身に成りますように (38 節)。

マリアが、こうして神の言葉を受け入れた、それこそ信仰と呼ばれるべき事柄ですけれど、受け入れるに至った一つのきっかけは、その前の天使ガブリエルの言葉にあったに違いありません。ガブリエルはこう言っています。

あなたの親類のエリサベトも、年をとっているが、男の子を身ごもっている。不妊の女と言われていたのに、もう六か月になっている。神にできないことは何一つない (36-37 節)。

「神にはできないことは何一つない」、それを説得するのに天使は「親類のエリサベト」のことを引き合いに出しています。エリサベトというのは、今日の聖書の直前に出てくる洗礼者ヨハネの母です。じつは彼女は不妊で、しかも高齢だった、にもかかわらず、いま神の力によって身ごもり、男の子ヨハネを産もうとしている、そういう女性です。マリアも親類であるなら知っていたはず。そのことを思い起こすように天使はマリアに言うのです。

マリアは突然に受胎告知を受け、どんなに驚き、恐れたことでしょうか。信じられないこと、驚天動地のこと、しかもそれが人に知られたら、まして婚約者ヨセフに知られたら、そう考えると、天使のお告げを受け入れることは、不可能に近いほど難しいことでした。そのようなとき、神は、いったん自分のことを考えるのを止めて、自分の外を見るように、しばしば促します。自分だけを見つめて狭くなってしまった視野を広くするようというのです。

マリアは目を転じました。エリサベトへと目を向けました。そこで御心はなっていました。かくてマリアは不信仰へと転落しかねない自分を克服し「わたしは主のはしためです。お言葉どおり、この身に成りますように」と語ることができたのです。これがマリアの信仰です。

今日のはじめに、このコロナ禍の中で私たちが、クリスマスをお祝いすることの意味はどこにあるのだろう、そんな問いから、話をしてきました。私はマリアの信仰の中にそれを見つけることができるように思います。

マリアの最後の言葉に注意していただきたいのです。なるほどマリアは戸惑い、悩み、恐れます。しかしその思いに逆らって、それを後回しにして、神の言葉に身を委ねます。私は主のはしため、御心になるように！ この者をも、もし神のためにお使いいただけるなら、用いてください。人間の

現実に逆らって神の現実に従う(それでもなお)の信仰、これが今日私たちに示されました。これをクリスマスのメッセージとして私たちは聞きたいのです。

コロナはなお猛威をふるっています。そのための社会的な矛盾はますます激化しています。このときこそ、私たちは冷静さを失わず、醒めた目をもって、神に希望をたくしたいのです。なお暗いこの世にあって、神が人となって、私たちと共に生きようとされた、このクリスマスの事実に立って、神への望みを失わず歩みたい。それがコロナ禍のクリスマスの意味です。